

向こう1か月間における主な病害虫の発生動向は次のように予想されます。

【予報の概要】

農作物名	病害虫名	発 生 程 度	
		現 況	予 想
きゅうり	べと病	並	並
	うどんこ病	やや少	やや少
	褐斑病	少	少
	灰色かび病	並	並
	ミナミキイロアザミウマ	やや少	やや少
	コナジラミ類	並	やや多
トマト	黄化葉巻病	やや多	やや多
	灰色かび病	やや少	やや少
	コナジラミ類	並	やや多
いちご (本圃)	うどんこ病	並	並
	灰色かび病	やや少	やや少
	アブラムシ類	並	やや多
	ハダニ類	少	やや少
	アザミウマ類	少	やや少
たまねぎ (早生)	べと病	やや少	やや少
	白色疫病	並	並
	ネギアザミウマ	並	並
茶	カンザワハダニ	少	やや少

【発生予報】 本文の()内は平年値

きゅうり

1. べと病

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

2月前期の巡回調査(6筆)の結果、発病葉率は3.3%(2.4%)、発生圃場率は33.3%(29.7%)であった。

2. うどんこ病

(1) 予報内容：発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

2月前期の巡回調査(6筆)の結果、発病葉率は0.2%(2.8%)、発生圃場率は16.7%(40.9%)であった。

3. 褐斑病

(1) 予報内容：発生程度 少

(2) 予報の根拠

2月前期の巡回調査(6筆)の結果、発生を認めなかった(発病葉率0.0%、発生圃場率1.0%)。

4. 灰色かび病

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

2月前期の巡回調査(6筆)の結果、発生を認めなかった(発生を認めない)。

5. ミナミキイロアザミウマ

(1) 予報内容：発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

2月前期の巡回調査(6筆)の結果、発生を認めなかった(寄生葉率1.0%、発生圃場率19.2%)。

6. コナジラミ類

(1) 予報内容：発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

ア 2月前期の巡回調査(6筆)の結果、寄生葉率は1.2%(1.0%)、発生圃場率は33.3%(19.2%)であった。

イ 向こう1か月の気温は平年並かやや高い見込みであり、本虫の発生に好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 密度が高くなると防除が困難となるので、黄色粘着板等で本虫の発生状況を把握し、早期の防除に努める。

イ タバココナジラミは退緑黄化病の病原ウイルス(CCYV)を媒介するので、防除を徹底する。

ウ 退緑黄化病の発生はやや多い状況(2月前期巡回調査結果 発病株率28.2%、発生圃場率100%)であり、次作に持ち込まないように防除対策を徹底する。

エ 薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統(令和7年長崎県病害虫防除基準P149~150の「作用機構による分類(IRAC)」参照)の薬剤を連用しない。

オ 栽培終了後は施設の開口部を密閉し、日中の室温50以上を1週間以上維持し本虫を死滅させ、施設外への分散を防ぐ。

トマト

1. 黄化葉巻病

(1) 予報内容：発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

2月前期の巡回調査(9筆)の結果、発病株率は1.2%(0.5%)、発生圃場率は33.3%(19.9%)で、一部多発圃場が見られた。

2. 灰色かび病

(1) 予報内容：発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

2月前期の巡回調査(9筆)の結果、果実での発生は認めなかった(発病果率0.0%、発生圃場率1.0%)。葉での発生も認めなかった(発病葉率0.1%、発生圃場率11.6%)。

3. コナジラミ類

(1) 予報内容：発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

ア 2月前期の巡回調査(9筆)の結果、寄生葉率は2.5%(2.4%)、発生圃場率は33.3%(41.0%)であり、一部多発圃場が見られた。

イ 向こう1か月の気温は平年並かやや高い見込みであり、本虫の発生に好適である。

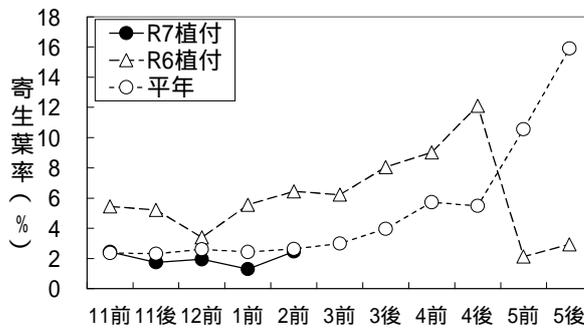


図 トマト コナジラミ類 寄生葉率

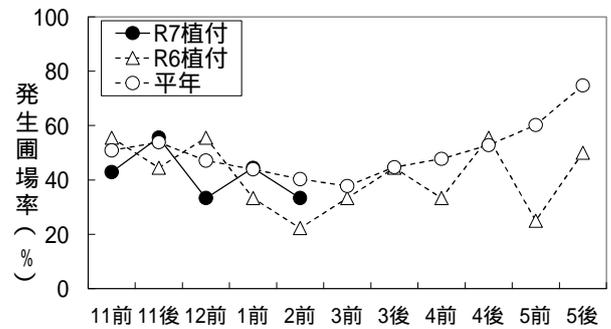


図 トマト コナジラミ類 発生圃場率

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 密度が高くなると防除が困難となるので、黄色粘着板等で本虫の発生状況を把握し、早期の防除に努める。
- イ タバココナジラミは黄化葉巻病や黄化病の病原ウイルスを媒介するので、防除を徹底する。
- ウ 薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統（令和7年長崎県病害虫防除基準P165～167の「作用機構による分類（IRAC）」参照）の薬剤を連用しない。
- エ コナジラミ類は葉裏に多く寄生しているため、かけむらがないように丁寧に薬剤散布する。
- オ マルハナバチを使用するハウスでは、影響の少ない薬剤を使用する。
- カ 施設内の雑草は、本虫の増殖源となるので除草を徹底する。

いちご

1. うどんこ病

- (1) 予報内容：発生程度 並
- (2) 予報の根拠

2月前期の巡回調査（26筆）の結果、葉および果実での発生を認めなかった（発生を認めない）。

2. 灰色かび病

- (1) 予報内容：発生程度 やや少
- (2) 予報の根拠

2月前期の巡回調査（26筆）の結果、発病果率は0.0%（0.2%）、発生圃場率は15.4%（18.8%）であった。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 夜間は暖房機を断続的に稼働し、曇雨天日や気温が低い日もできるだけ換気を行いハウス内が多湿にならないような管理に努める。
- イ 被害果等の発病部位は伝染源となるので見つけしだい取り除き、ビニール袋等に密閉してハウス外に持ち出し処分する。
- ウ 収穫終了後の果梗枝は伝染源となるので早めに取り除く。
- エ 予防的な薬剤防除に努め、特に曇雨天が続くことが予想される場合は徹底する。
- オ 薬剤耐性発達防止のため、同一系統（令和7年長崎県病害虫防除基準P179～180の「作用機構による分類（FRAC）」参照）の薬剤を連用しない。

3. アブラムシ類

- (1) 予報内容：発生程度 やや多
- (2) 予報の根拠

ア 2月前期の巡回調査（26筆）の結果、寄生株率は1.5%（1.3%）、発生圃場率は26.9%（14.1%）であった。

イ 向こう1か月の気温は平年並かやや高い見込みであり、本虫の発生に好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

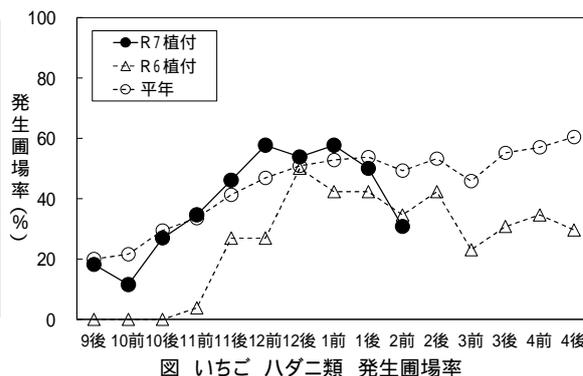
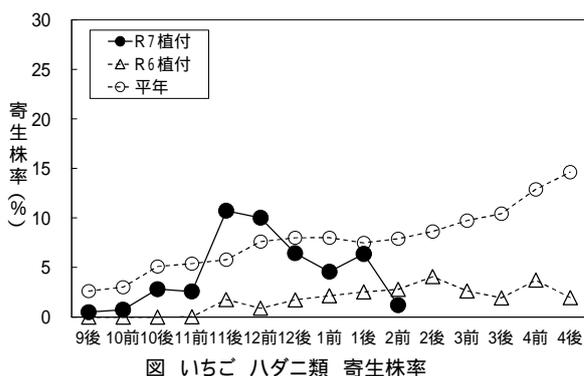
- ア 早期発見、早期防除に努める。
- イ 薬剤のかけむらがあると防除効果が低下するので葉裏まで十分に散布する。
- ウ 薬剤の選定にあたっては、使用時期などラベルをよく確認し、ミツバチや天敵への影響を考慮する。
- エ 薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統（令和7年長崎県病害虫防除基準P182～183の「作用機構による分類（IRAC）参照」）の薬剤の連用を避ける。

4. ハダニ類

(1) 予報内容：発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

- ア 2月前期の巡回調査（26筆）の結果、寄生株率は1.2%（7.9%）、発生圃場率は30.8%（49.3%）であった。
- イ 向こう1か月の気温は平年並かやや高い見込みであり、本虫の発生に好適である。



(3) 防除上注意すべき事項

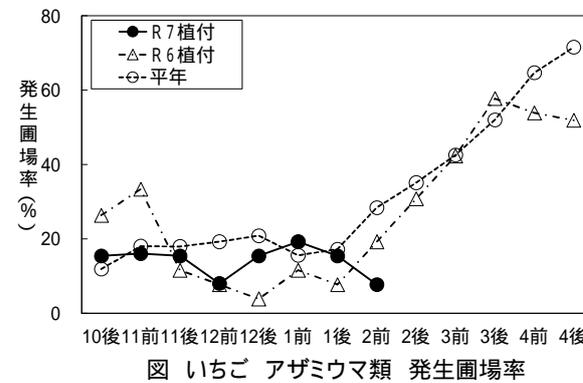
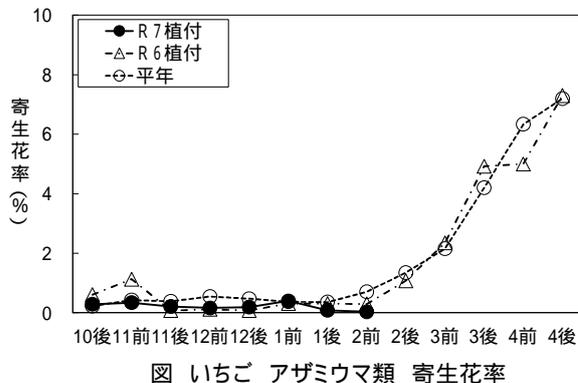
- ア 早期発見、早期防除に努める。防除効果を高めるため薬剤散布前に古葉を除去し、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。
- イ 薬剤の選定にあたっては、使用時期などラベルをよく確認し、ミツバチや天敵のカブリダニ類等への影響を考慮する。
- ウ 薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統（令和7年長崎県病害虫防除基準P182～183の「作用機構による分類（IRAC）」参照）の薬剤の連用を避け、薬剤感受性低下の恐れが少ない気門封鎖剤や異なる系統の薬剤によるローテーション散布を行う。

5. アザミウマ類

(1) 予報内容：発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

- ア 2月前期の巡回調査（26筆）の結果、寄生花率は0.0%（0.7%）、発生圃場率は7.7%（28.4%）であった。
- イ 向こう1か月の気温は平年並か高い見込みであり本虫の発生に好適である。



(3) 防除上注意すべき事項

- ア 早期発見、早期防除に努める。

イ 薬剤の選定にあたっては、使用時期などラベルをよく確認し、ミツバチや天敵への影響を考慮する。

ウ 薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統（令和7年長崎県病害虫防除基準P182～183の「作用機構による分類（IRAC）参照」）の薬剤の連用を避ける。

たまねぎ（早生）

1. ベと病

(1) 予報内容：発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

ア 2月前期の巡回調査（16筆）の結果、発生を認めなかった（発病株率0.04%、発生圃場率12.4%）。

イ 気象に基づく二次伝染推定モデルによると、本病の感染に好適、準好適な条件が出現しており、潜伏期間後に発病する可能性がある。

表 タマネギベと病二次伝染推定モデルによる感染・準感染好適条件の出現状況

2026年	2月															
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
長崎					○								○	○		
島原					○											
平戸													○			
芦辺														○		○

注1) ○：感染好適条件 ○：準感染好適条件

注2) 気象データはアメダスデータ（気温・風速・湿度）を用いた。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 圃場の見回りをこまめに行い、発病株（一次感染株）は見つけ次第抜き取る。抜き取った株は圃場内に放置せず、胞子が周囲に飛散しないよう、その場で直ちに袋等に入れて圃場外に持ち出し、適切に処分する。

イ ベと病は条件が整うと感染と発病を繰り返し急激に蔓延するため、今後の気象情報等に留意し、一次感染株の見られる圃場では早急に薬剤散布を行う。また、発病が見られない圃場でも2月中下旬以降は定期的な予防散布を行う。薬剤散布量が十分でないと効果が低下するので、薬剤には展着剤を加用し、株全体が濡れるようむらなく散布する。

ウ 圃場の排水が悪いと本病の発生を助長するので排水対策を行う（明きよの切り直し等）。

エ 二次伝染推定モデルの判定結果は、病害虫防除所ホームページにおいて随時更新しているので参考にする。

2. 白色疫病

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

2月前期の巡回調査（16筆）の結果、発生を認めなかった（発生を認めない）。

3. ネギアザミウマ

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

2月前期の巡回調査（16筆）の結果、寄生株率は8.9%（10.7%）、発生圃場率は50.0%（49.1%）であった。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 多発してからの防除は困難であり、気温が高くなると急激に発生が多くなるため、早めの防除対策に努める。

イ 本虫の寄生により吸汁されると病害の発生を助長する恐れがあるため、発生が見られる圃場はすみやかに薬剤散布による防除を行い、散布にあたっては心葉にしっかりと丁寧に散布する。

茶

1.カンザワハダニ

(1) 予報内容：発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

ア 2月前期の巡回調査(12筆)の結果、発生を認めなかった(寄生葉率0.4%、発生圃場率12.0%)。

イ 向こう1か月の気温は平年並かやや高い見込みであり、本虫の発生に好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 2月下旬頃から産卵を始めるので、一番茶の被害を予防するため防除を徹底する。

イ 薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統(令和7年長崎県病害虫防除基準P349~350の「作用機構による分類(IRAC)」参照)の薬剤を連用しない。

